

Jakub HRŮŠA

Principal Guest Conductor

首席客演指揮者

ヤクブ・フルシャ

12/11 12/16



© 堀田力丸

都響首席客演指揮者、バンベルク響首席指揮者、フィルハーモニア管首席客演指揮者、チェコ・フィル常任客演指揮者（2018/19シーズンより首席客演指揮者）。これまでにプラハ・フィルハーモニア管音楽監督兼首席指揮者、グラインドボーン・オン・ツアー音楽監督などを歴任。ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、クリーヴランド管などへの定期的な出演に加え、シカゴ響、ニューヨーク・フィル、ミラノ・スカラ座フィル、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、パリ・オペラ座、ウィーン国立歌劇場などへのデビューが続いている。国際マルティヌー協会会長。都響へは2008年に初登壇、2010年に首席客演指揮者へ就任。在任中はマルティヌーの交響曲全曲、スークの標題的4部作から3曲などチェコの重要作を紹介、また《幻想交響曲》、《アルプス交響曲》、《春の祭典》などで鮮烈な印象を残した。2017年度シーズンをもって首席客演指揮者の任を離れるが、今後も客演が期待されている。

Jakub Hruša is Principal Guest Conductor of TMSO and Philharmonia Orchestra, Permanent Guest Conductor of Czech Philharmonic, and Chief Conductor of Bamberg Symphony. He will be inaugurated as Principal Guest Conductor of Czech Philharmonic in 2018/19 season. Hruša was formerly Music Director and Chief Conductor of Prague Philharmonia and Music Director of Glyndebourne on Tour. He has performed with many of orchestras including Gewandhausorchester Leipzig, Cleveland Orchestra, Chicago Symphony, New York Philharmonic, Orchestra Filarmonica della Scala, and Royal Concertgebouw Orchestra, and has appeared at Opéra national de Paris and Wiener Staatsoper, among others.



第844回 定期演奏会Aシリーズ

Subscription Concert No.844 A Series

東京文化会館

2017年12月11日(月) 19:00開演

Mon. 11 December 2017, 19:00 at Tokyo Bunka Kaikan

指揮 ● ヤクブ・フルシャ Jakub HRŮŠA, Conductor
コンサートマスター ● 四方恭子 SHIKATA Kyoko, Concertmaster

ドヴォルザーク：序曲《オセロ》 op.93 B.174 (16分)

Dvořák: "Othello", Overture, op.93 B.174

マルティヌー：交響曲第2番 H.295 (24分)

Martinů: Symphony No.2, H.295

- I Allegro moderato
- II Andante moderato
- III Poco allegro
- IV Allegro

休憩 / Intermission (20 分)

ブラームス：交響曲第2番 二長調 op.73 (42分)

Brahms: Symphony No.2 in D major, op.73

- I Allegro non troppo
- II Adagio non troppo
- III Allegretto grazioso (Quasi Andantino)
- IV Allegro con spirito

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：東京都、東京都教育委員会

助成：文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業)



文化庁

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

お願い | 演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないようにご注意ください。
写真撮影、録音、録画はお断りいたします。音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。

ドヴォルザーク： 序曲《オセロ》op.93 B.174

アントニン・ドヴォルザーク (1841~1904) は、1891年3月から翌年1月にかけて、《自然と人生と愛》三部作、すなわち《自然の中で》op.91、《謝肉祭》op.92、そして《オセロ》op.93という3曲の演奏会用序曲を作曲した。ただしこれらの名前は後に出版されるときに確定したもので、初演時、各曲のタイトルは、それぞれ《自然》《人生 (チェコの謝肉祭)》《愛 (オセロ)》と呼ばれており、作品番号も3曲まとめてop.91となっていた。

現在は独立して演奏されることが多い3曲だが、作曲者は当初、組曲のようにひとまとまりの作品として演奏することを意図しており、実際、プラハでの初演でも、1892年10月21日に行われたニューヨークでの演奏会でも (いずれも作曲者指揮)、3曲がまとめて演奏されている。また、《自然の中で》冒頭の主題が他の2曲に登場するなど、3曲は内容的にも関連づけられている。

《オセロ》は、1891年11月、ドヴォルザークが50歳のときに着手され、翌年1月に完成した。題名はもちろんシェイクスピアの戯曲に基づいている。ドヴォルザークは1873年に序曲《ロメオとジュリエット》という曲を書いていたが、自ら破棄してしまったので、シェイクスピアを題材とする彼の作品は、この《オセロ》のみということになる。なお、他の2つの序曲と同様、題名には迷ったようで、当初は《悲劇的》あるいは《エロイカ》といった題名も考えられていた。

レントの序奏と、アレグロ・コン・プリオの主部を持つ自由なソナタ形式で書かれている。戯曲の内容を忠実にたどるものではないが、たとえば第1主題 (木管が先導する) は嫉妬を表すというように、各部分はある程度ストーリーと関連づけられていると考えられている。

(増田良介)

作曲年代：1891年11月~1892年1月18日

初演：(三部作全曲) 1892年4月28日 プラハ

作曲者指揮 プラハ国民劇場管弦楽団

楽器編成：フルート2 (第1はピッコロ持替)、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、ハープ、弦楽5部

マルティヌー： 交響曲第2番 H.295

20世紀チェコを代表する作曲家のひとり、ボフスラフ・マルティヌー（1890～1959）の交響曲第2番は、1943年、クリーヴランドのチェコスロヴァキア出身者コミュニティ「アメリカン・フレンズ・オブ・チェコスロヴァキア」からの依頼で作曲され、「クリーヴランドのわが同胞たち」に捧げられた。

1940年6月、ナチス・ドイツ侵攻直前に活動拠点のパリを脱出、作曲当時のマルティヌーはアメリカで亡命生活を送っていた。彼はすでに高い評価を受けていた作曲家だったが、交響曲第1番を作曲したのは50代になってからだった。しかし、第1番を書くまでに時間を要したが第2番は半年で書き上げたブラームスと同様、マルティヌーも第2番はごく短期間で完成させた。また、作曲者はこの曲を「平安で叙情的」と形容しているが、大規模で劇的な第1番と穏やかな第2番という性格的な対比もブラームスと似ている。

初演は、チェコスロヴァキア建国25周年にあたる10月28日にエーリヒ・ラインスドルフ（1912～93）指揮クリーヴランド管弦楽団により行われた。なお、同じ日にアルトゥール・ロジンスキ（1892～1958）指揮ニューヨーク・フィルによって『リディツェへの追悼』H.296（プラハ近郊の町リディツェで起きたナチスによる虐殺事件への抗議の音楽）が初演されているが、作曲者は交響曲の方に出席している。

言うまでもなく当時のチェコスロヴァキアは、ナチス・ドイツに占領されていた。そのため演奏会は、アメリカ国民のチェコスロヴァキアに対する共感を反映し、大きな関心呼んだ。このプロジェクトを支援していたチェコスロヴァキア亡命政府の外務大臣ヤン・マサリク（1886～1948）は、ラインスドルフにわざわざ初演に出席できないことを詫げる電報を送ってきた。スメタナの《ヴァルタヴァ（モルダウ）》も演奏され、チェコスロヴァキア一色となった演奏会では、民族衣装の少女たちがマルティヌーにかごいっぱいの花を捧げた。

そして、地元紙『クリーヴランド・プレイン・ディーラー』は「チェコスロヴァキアは今も歌う」という社説で、マルティヌーの交響曲を讃えた。曲はすぐに評判となり、同年12月30日と31日、翌年1月1日にロジンスキ指揮ニューヨーク・フィルによって再演された。1944年には他にも、フリッツ・ライナー指揮ピッツバーグ交響楽団、ディミトリ・ミトロプーロス指揮ミネアポリス交響楽団、ユージン・オーマンディ指揮フィラデルフィア管弦楽団などがこの曲を取り上げている。

曲は4つの楽章を持っているが、第1番よりも短く室内乐的で、チェコの民族的要素が強い。この曲以降、マルティヌーは第1番のように大規模な作品よりも、第2番のように簡素な作風を好むようになる。1951年に評論家オーリン・ダウンズ

(1886~1955)が行ったインタビューにおいて、マルティヌーは、第1番は演奏されたときは気に入っていたが、今となっては過去の作品であり、今は交響曲第2番の方が気に入っていると語っている。

第1楽章 アレグロ・モデラート ソナタ形式。開始後まもなく第1ヴァイオリンが提示する第1主題最初の3音A-F-A（イーヘーイ）が、基本音型として楽章全体に登場する。第2主題は同じく第1ヴァイオリンが提示する、半音階的に下降するリズム的なもの。

第2楽章 アンダンテ・モデラート 三部形式。オーボエとクラリネットの吹くドヴォルザーク的なひなびた旋律が弦に引き継がれ、息長く歌われていく。弦とピアノの和音の上で木管が下降音型を吹く中間部は、いくらか不穏な雰囲気となる。

第3楽章 ポーコ・アレグロ 三部形式。ユーモラスな行進曲。この行進曲は第1楽章に使用される構想もあった。中間部の後半では、遠くから呼びかけるような、弱音器付きトランペットの印象的なソロがある。

第4楽章 アレグロ 自由なロンド形式によるフィナーレ。変化に富んだ多彩な主題が出てくるが、常にせわしなく動きつづけ、晴れやかな雰囲気に終始する。

(増田良介)

作曲年代：1943年5月29日～7月24日

初 演：1943年10月28日 クリーヴランド

エーリヒ・ラインズドルフ指揮 クリーヴランド管弦楽団

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ3、クラリネット3、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、トライアングル、小太鼓、大太鼓、シンバル、タムタム、ハープ、ピアノ、弦楽5部

ブラームス： 交響曲第2番 二長調 op.73

ヨハネス・ブラームス (1833~97) が初めての交響曲の構想から完成までに実に20年以上もの歳月をかけたことは、よく知られている。生来の完全主義的な性格と尊敬するベートーヴェン (1770~1827) への強い意識が、伝統ジャンルの中でも最も重要な曲種である交響曲の作曲にあたって、彼をことさら慎重にさせたのだ。しかしひとたび交響曲第1番を1876年に完成させた彼は、翌1877年6月、避暑で訪れた南オーストリアのヴェルター湖畔の町ペルチャッハにおいて、早速次の交響曲第2番に着手し、秋には早くもそれを完成させる。試行錯誤の繰り返しだった第1番での苦吟とは正反対の驚くべき速筆ぶりには、第1番の完成ですっかり肩の荷がおりた彼の様子が窺えるかのようだ。

作風の点でもこの第2番は、緊迫感に満ちた第1番とは対照的で、あたかもブ

ラームスのふっきれた心を表すかのような明るさと流麗さを持つとともに、風光明媚なペルチャッハの自然を彷彿とさせる穏やかな叙情に満ちている。この作品がブラームスの「田園交響曲」と呼ばれるのもそのような牧歌的性格ゆえだろう。しかし最初の2つの楽章では、そうした明るさの中に孤独な寂寥感や暗い陰りも垣間見られ、それがこの交響曲に情感豊かなロマン的奥行きを与えている。

一方でこの交響曲がブラームスならではの緻密な論理的書法で構築されていることにも留意すべきだろう。とりわけ第1楽章冒頭に低音に示されるD-Cis-D（ニー嬰ハニ）の動機は全曲の基本動機として作品を統一する役割を果たしている。主題の展開法も徹底しており、こうした厳しい論理性にベートーヴェンの後継者であろうとする彼の姿勢が窺える。

第1楽章 アレグロ・ノン・トロツポ ニ長調 今述べた低音の基本動機に導かれて、ホルンが牧歌的な第1主題を出す。第2主題はチェロとヴィオラによって歌われる情感豊かなもの。展開部では劇的な盛り上がりが見られる。ホルンによる息の長い歌に続くコーダは美しい夕映えを思わせる。

第2楽章 アダージョ・ノン・トロツポ ロ長調 内面の感情を綴ったような緩徐楽章。主部はチェロが寂しげに歌い紡ぐ主題に始まる哀愁に満ちたもの。それに対し嬰ヘ長調の中間部は木管の軽やかな調べが明るい光をもたらす。しかしそれも長く続かず、不安な感情に駆られるように暗い劇的な高まりを見せる。

第3楽章 アレグレット・グラツィオーソ（クアジ・アンダンティーノ） ト長調 オーボエが示すのどかな主題を中心とする主部に、急速な2つのエピソード（プレスト・マ・ノン・アッサイ）が挟まれる。第1エピソードは主部主題の変奏で、第2エピソードの動機も主部主題から導かれている。

第4楽章 アレグロ・コン・スピリット ニ長調 明朗な気分にあふれるソナタ形式のフィナーレ。第1主題はまさに喜ばしさと活気に溢れている。たっぷりとした第2主題もおおらかな気分にあふれたもの。これほど上機嫌なブラームスも珍しいといえるほどの快活さでダイナミックに発展し、その漲るエネルギーはコーダで圧倒的な頂点を築き上げる。

（寺西基之）

作曲年代：1877年

初 演：1877年12月30日 ウィーン
ハンス・リヒター指揮 ウィーン・フィル

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦楽5部



第845回 定期演奏会Bシリーズ

Subscription Concert No.845 B Series

サントリーホール

2017年12月16日(土) 19:00開演

Sat. 16 December 2017, 19:00 at Suntory Hall

指揮 ● ヤクブ・フルシャ Jakub HRŮŠA, Conductor
コンサートマスター ● 矢部達哉 YABE Tatsuya, Concertmaster

マルティヌー：交響曲第1番 H.289 (35分)

Martinů: Symphony No.1, H.289

- I Moderato - Poco più mosso
- II Allegro - Poco moderato
- III Largo
- IV Allegro non troppo

休憩 / Intermission (20 分)

ブラームス：交響曲第1番 ハ短調 op.68 (44分)

Brahms: Symphony No.1 in C minor, op.68

- I Un poco sostenuto - Allegro
- II Andante sostenuto
- III Un poco allegretto e grazioso
- IV Adagio - Più andante - Allegro non troppo, ma con brio

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：東京都、東京都教育委員会

シリーズ支援：  明治安田生命

助成：文化庁文化芸術振興費補助金

(舞台芸術創造活動活性化事業)



演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

お願い

演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないようにご注意ください。
写真撮影、録音、録画はお断りいたします。音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。

マルティヌー： 交響曲第1番 H.289

20世紀のチェコを代表する作曲家のひとり、ボフスラフ・マルティヌー（1890～1959）は、モラヴィア（当時はオーストリア＝ハンガリー帝国の一部）の小さな村ポリチュカに生まれた。6歳でヴァイオリンを始めた彼はすぐに才能を発揮する。しかし、16歳で入学したプラハ音楽院は怠慢を理由に退学となり、卒業することはできなかった。

その後は小学校の教師やチェコ・フィルハーモニー管弦楽団のヴァイオリン奏者として生活していたが、1923年、こどもの頃から続けていた作曲を本格的に勉強するため、奨学金を得てパリに移り、アルベール・ルーセル（1869～1937）に師事する。パリで作曲家として頭角を現し、次々と作品を発表していたマルティヌーだが、1940年6月、ナチス・ドイツの侵攻を逃れてパリを脱出、ポルトガルなどを経由し、1941年3月からはアメリカで亡命生活を送ることになる。

彼はいずれプラハに戻るつもりでいたようだが、第二次世界大戦終結後の1948年、チェコスロヴァキアに共産党政権が樹立されると、帰国を断念し、米国の市民権を獲得する。しかし米国に永住することはなく、1953年にはヨーロッパに戻る。その後、彼はフランス、イタリアを経てスイスに落ち着き、1959年、同地で亡くなった。

マルティヌーが最初の交響曲である第1番を書いたのは1942年の夏で、すでに51歳になっていた。多産な作曲家であったマルティヌーは、それまでにオペラ、バレエ、協奏曲、管弦楽曲、室内楽曲など、交響曲以外のあらゆる分野で200以上の作品を発表していた。また、交響曲を書きたいという気持ちも以前から持っており、1928年にも一度作曲を試みている。しかしこれは最終的に、交響曲ではなく《ラプソディ》H.171となった。

彼がなかなか交響曲を書かなかったのは、他の多くの作曲家と同様、交響曲を他とは異なる特別な分野と見なしていたためであるようだ。交響曲第1番のプログラムノートで彼は、「自分の交響曲第1番という問題に直面すると、非常に過敏に、そして真剣に構えてしまい、考え方が、ベートーヴェンではなくブラームスの第1番に結びついてしまうことは理解していただけるでしょう」と書いている。

交響曲第1番は、1942年、ボストン交響楽団の音楽監督だったセルгей・クーセヴィツキー（1874～1951）の依頼によって書かれた。これは、同年1月に世を去ったクーセヴィツキーの夫人ナタリー（1880～1942）の莫大な遺産によって設立された財団によるもので、ナタリーの思い出に捧げる作品を、というのが依頼の内容だった。ただし、マルティヌーはこれより前、1941年12月19日付けのクーセヴィ

ツキー宛ての手紙で、彼のために交響曲を作曲したいと書いており、依頼はこれに応えてという意味もあったと思われる。

クーセヴィツキーの指揮で行われた初演は大成功で、『ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン』紙の批評家・作曲家ヴァージル・トムソン（1896～1989）はこの曲を絶賛し、マルティヌーを、愛国的作曲家としてドヴォルザークの上、スメタナと同格と評した。また、クーセヴィツキーも「私は25年以上これほど完璧な作品を手にしたことがない」と絶賛した（ただし彼はバルトークの《管弦楽のための協奏曲》でも同じようなことを言っている）。なお、第1番のあと、マルティヌーは1946年まで毎年1曲のペースで第5番までの交響曲を作曲する。第6番だけは1951年にニューヨークで書き始め、1953年にパリで完成したので、6曲の交響曲のうち5曲がアメリカで完成されたことになる。

交響曲第1番は4つの楽章を持つ古典的な構成の作品だが、シンコペーションの多用、ピアノが活躍する特徴的なオーケストレーションなどには、マルティヌーの作品に通底する個性がよく表れている。その一方で、交響曲第2番以降、マルティヌーは簡潔に切り詰められたスタイルへの志向を強めていくので、第1番は結果的に6曲のうちで最も規模が大きく、複雑な構成を持つ作品となり、それがこの曲の個性となっている。

第1楽章 モデラート～ポーコ・ピウ・モッソ 自由なソナタ形式（再現部のないソナタ形式と見ることも可能）。半音階を上行する短い序奏に続き、弦合奏をメインに第1主題が提示される。これは聖ヴェンチェスラス（ヴァーツラフ）の加護を求める中世ボヘミアのコラルールから取られたとされるもの。第1主題も、木管とピアノに現れる第2主題も、シンコペーションを特徴としている。また、これらの主題のパーツや序奏の上行音型、そして「ドレドレ」や「ドシドシ」といった、半音または全音を往復する動きなどは全楽章を通じて現れ、全曲を統一する役割を果たしている。

第2楽章 アレグロ 三部形式によるスケルツォ。管楽器と弦楽器のピツィカートによるリズム（ピアノが鋭く叩く和音が印象的）で始まる主部は力強い。これが最後にテンポを上げて終わると、イングリッシュホルンのB（変ロ）の音だけが残ри、いくらかのどかさのあるトリオ（ポーコ・モデラート）に移行する。オーボエの吹くひなびた旋律に導かれるこのトリオは、弦楽器がまったく使われていない。打楽器のみによる経過句をはさんで主部が回帰する。

第3楽章 ラルゴ 三部形式。ピアノとタムタムによる鐘の音のような一撃に始まる。低弦が暗鬱にうごめいたあと、やがてヴァイオリンが悲痛な歌を歌い始め、しばしば分割される弦を中心に高揚していく。中間部ではトランペットが弔いの歌を吹く。1946年にこの曲のプラハ初演を指揮したシャルル・ミュンシュ（1891～

1968)は「私は彼を現存する最も偉大な作曲家のひとりと思っています。交響曲第1番の第3楽章を指揮するときはいつも深く心を動かされます」と述べた。

第4楽章 アレグロ・ノン・トロppo 自由なロンド形式によるフィナーレ。ボヘミア民謡も取り入れた、多彩なリズムを持つ主題が次々に現れる。第1楽章冒頭の半音階上昇をはじめ、前の楽章の素材もまじえつつエネルギッシュに進み、明るい終結に至る。

(増田良介)

作曲年代：1942年6月～9月1日

初 演：1942年11月13日 ポストン
セルゲイ・クーセヴィツキー指揮 ポストン交響楽団

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット3、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、トライアングル、タンブリン、小太鼓、太太鼓、シンバル、タムタム、ハープ、ピアノ、弦楽5部

ブラームス： 交響曲第1番 ハ短調 op.68

1853年秋、当時まだ20歳の無名の作曲家ヨハネス・ブラームス(1833～97)はデュッセルドルフのロベルト・シューマン(1810～56)のもとを訪れた。シューマンはブラームスの才能に驚嘆し、久々に評論の筆を執って彼を音楽の“遅い闘争者”として称賛、「新しい道」と題されたこの評論によって、ブラームスは一躍名を知られることになる。

言うまでもなくシューマンはロマン主義的な音楽を追求した作曲家だが、一方でベートーヴェン(1770～1827)以来の伝統を重視し、リスト(1811～86)やワーグナー(1813～83)らの革新的な動きに懐疑的だった。だからロマン的精神を伝統様式のうちに打ち出したブラームスの音楽は、シューマンの目にはドイツ的伝統を理想的に継承発展させるものと映ったのである。

自身ベートーヴェンを崇敬していたブラームスにとって、シューマンの賛辞は光栄であるとともに大変な重荷にもなった。生来の自己批判的な性格もあって、彼はベートーヴェンを継ぐジャンルとして最も重要な交響曲の作曲に慎重にならざるを得なくなり、シューマンの薫陶を受けて間もない1855年前後に最初の交響曲を構想するも、それが結実するのは実に約20年後、1876年のこととなる(第2楽章は初演後に大幅改訂)。

こうして出来上がった作品は、長年の苦心の甲斐あって、劇的な闘争から輝かしい勝利へ至る全体の構図、徹底した主題展開法による緊密な構築性といった

点でベートーヴェンの伝統を継承した作風を示している。

その一方、そこにシューマンの未亡人クララ (1819 ~ 96) に対する想いも重ね合わせられていることが、クララ Clara の音名象徴 C-A-A (ハーイーイ) を様々な旋律動機の中に織り込んでいることや、終楽章の暗い序奏の最後に突如霧が晴れるかのように現れるホルンの旋律がクララの誕生日にブラームスが贈った歌の引用 (旋律自体はブラームスのオリジナルでなく彼がアルプスで耳にしたもの) であることなどに示唆されている。

ベートーヴェンの古典的伝統を受け継ぎつつも、そうした個人的な愛の表現を秘かに織り込んでいるところに、19世紀後半の作曲家としてのブラームスのロマン派的側面が窺えよう。

第1楽章 ウン・ポーコ・ソステヌート〜アレグロ ハ短調 緊迫した序奏に始まり、主部も緊張感に満ちた闘争的な展開が繰り上げられる。

第2楽章 アンダンテ・ソステヌート ホ長調 豊かな叙情とロマン性に満ちた三部形式の緩徐楽章で、最後の部分では独奏ヴァイオリンとホルンが愛の語らいのようなデュエットを奏でる。

第3楽章 ウン・ポーコ・アレグレット・エ・グラツィオーソ 変イ長調 穏やかな間奏風の楽章。

第4楽章 アダージョ〜ピウ・アンダンテ〜アレグロ・ノン・トロppo・マ・コン・ブリオ ハ短調〜ハ長調 緊迫感漂う序奏に始まり、やがて前述のホルンの旋律と荘重なコラールが奏された後、ふっきれたかのような明朗な第1主題が示されて晴れやかな発展をみせていく。

(寺西基之)

作曲年代：1874~76年 (構想は1850年代半ばから)

初 演：1876年11月4日 カールスルーエ

オットー・デッツォフ指揮 カールスルーエ宮廷管弦楽団

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部

12/
2412/
2512/
26

ONO Kazushi

Music Director

音楽監督 大野和士

© 堀田力丸

1987年トスカニーニ国際指揮者コンクール優勝。これまでに、ザグレブ・フィル音楽監督、都響指揮者、東京フィル常任指揮者（現・桂冠指揮者）、バーデン州立歌劇場音楽総監督、ベルギー王立歌劇場（モネ劇場）音楽監督、アルトゥーロ・トスカニーニ・フィル首席客演指揮者、フランス国立リヨン歌劇場首席指揮者を歴任。現在、都響およびバルセロナ響の音楽監督を務めている。2016年9月に新国立劇場オペラ部門芸術参与へ就任、2018年9月に同劇場芸術監督へ就任予定。フランス批評家大賞、朝日賞など受賞多数。文化功労者。2017年5月、大野和士が9年間率いたリヨン歌劇場は、インターナショナル・オペラ・アワードで「最優秀オペラハウス2017」を獲得。自身は2017年6月、フランス政府より芸術文化勲章「オフィシエ」を受章、またリヨン市からリヨン市特別メダルを授与された。

Kazushi Ono is currently Music Director of Tokyo Metropolitan Symphony Orchestra and Barcelona Symphony Orchestra. He was formerly General Music Director of Badisches Staatstheater Karlsruhe, Music Director of La Monnaie in Brussels, Principal Guest Conductor of Filarmonica Arturo Toscanini, and Principal Conductor of Opéra National de Lyon. Ono was appointed Artistic Consultant of New National Theatre, Tokyo in September 2016, and will be inaugurated as Artistic Director of same Theatre in September 2018.

都響スペシャル「第九」

TMSO Special "Beethoven's 9th"

TMSO

東京芸術劇場コンサートホール

2017年12月24日(日) 14:00開演

Sun. 24 December 2017, 14:00 at Tokyo Metropolitan Theatre

東京文化会館

2017年12月25日(月) 19:00開演

Mon. 25 December 2017, 19:00 at Tokyo Bunka Kaikan

サントリーホール

2017年12月26日(火) 19:00開演

Tue. 26 December 2017, 19:00 at Suntory Hall

指揮 ● 大野和士 ONO Kazushi, Conductor

ソプラノ ● 林 正子 HAYASHI Masako, Soprano

メゾソプラノ ● 脇園 彩 WAKIZONO Aya, Mezzo-Soprano

テノール ● 西村 悟 NISHIMURA Satoshi, Tenor

バリトン ● 大沼 徹 ONUMA Toru, Baritone

合唱指揮 ● 増田宏昭 MASUDA Hiroaki, Chorus Master

合唱 ● 二期会合唱団 Nikikai Chorus Group, Chorus

コンサートマスター ● 山本友重 YAMAMOTO Tomoshige, Concertmaster

ベートーヴェン：交響曲第9番 二短調 op.125 《合唱付》(67分)

Beethoven: Symphony No.9 in D minor, op.125, "Choral"

I Allegro ma non troppo, un poco maestoso

II Molto vivace - Presto


III Adagio molto e cantabile

IV Presto - Allegro assai


本公演に休憩はございません。

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：東京都、東京都教育委員会

協賛： (有)共済企画センター (24日)

 (有)共済企画センター (25日)

 (株)東京エイドセンター (26日)

演奏時間は予定の時間です。

お願い

演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないようにご注意ください。
写真撮影、録音、録画はお断りいたします。音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。

Soprano

HAYASHI Masako

ソプラノ

林 正子

©anju



東京藝術大学卒業。同大学院、二期会オペラスタジオ修了。ジュネーヴ音楽院ソリスト・ディプロマ取得。五島記念文化賞オペラ新人賞受賞。スイス・ロマンダ管との共演、オーストリアの音楽祭への参加などヨーロッパを拠点に活動。国内でも東京二期会『サロメ』『ダナエの愛』『ナクソス島のアリアドネ』『ばらの騎士』に主演。コンサートでも主要オーケストラと共演、ソリストとして活躍。ジュネーヴ在住。二期会会員。

Masako Hayashi graduated from Tokyo University of the Arts. She completed a master's degree at the same university and the course of Nikikai Opera Institute. She also obtained a soloist diploma at the Conservatoire de musique de Genève. Hayashi is based in Europe. In Japan, she has performed leading roles in operas including *Salome*, *Die Liebe der Danae*, *Ariadne auf Naxos*, and *Rosenkavalier*. Currently, she lives in Genève. She is a member of Nikikai.

Mezzo-Soprano

WAKIZONO Aya

メゾソプラノ

脇園 彩



東京藝術大学卒業、同大学院修了。2014年からイタリア各地の歌劇場へデビュー。アルベルト・ゼッダやファビオ・ルイジに絶賛され、彼らが率いる音楽祭で《ランスへの旅》《フランチェスカ・ダ・リミニ》に出演。ミラノ・スカラ座アカデミー生として《チエネレントラ》主役を演じるなど、異例の速さでイタリア・オペラ界における活躍の場を広げている。2017年4月、藤原歌劇団《セビリャの理髪師》で日本でのオペラ・デビューを果たした。

Aya Wakizono graduated from Tokyo University of the Arts and obtained a master's degree at the same university. She was highly praised by Alberto Zedda and Fabio Luisi, and appeared in *Il Viaggio a Reims* and *Francesca da Rimini* in opera festivals that they conducted. She debuted at Teatro alla Scala as a member of the Accademia, playing the lead in *La Cenerentola*. She is widening her appeal in Italy with exceptional speed.

Tenor

NISHIMURA Satoshi

テノール

西村 悟

©Yoshinobu Fukaya (aura)



日本大学藝術学部、東京藝術大学大学院修了。リッカルド・ザンドナーイ国際声楽コンクール入賞、日本音楽コンクール第1位。ヨーロッパ・デビューは大野和士指揮バルセロナ響とのメンデルスゾーン《讃歌》で、現地有力紙『La Vanguardia』にて高評を得た。近年は《ファウストの劫罰》《大地の歌》《千人の交響曲》に出演。オペラでは『ラ・トラヴィアータ』『蝶々夫人』『仮面舞踏会』『ラインの黄金』『ルチア』などに出演。藤原歌劇団団員。

Satoshi Nishimura graduated from Nihon University College of Art, and received a master's degree from Tokyo University of the Arts. In 2011, he won the 2nd Prize at Riccardo Zandonai International Competition for Young Opera Singers in Italy. He also won the 1st Prize at 80th Music Competition of Japan. Nishimura has appeared in *La Traviata* and *Madama Butterfly*, among others. He is a member of Fujiwara Opera.

Baritone

ONUMA Toru

バリトン

大沼 徹



東海大学卒業、同大学院修了。ベルリン・フンボルト大学へ留学。その後マイセンにて研鑽を積む。二期会オペラ研究所修了。第21回五島記念文化賞オペラ新人賞受賞。東京二期会『オテロ』（リッツィ＝ブリニョーリ指揮 都響）イアーゴで本格デビュー。その後も『魔笛』パパゲーノ、『サロメ』ヨカナーン（ゾルテス指揮 都響）、『パルジファル』アムフォルタス、『トリスタンとイゾルデ』クルヴェナールなど大役に次々と出演。二期会会員。

Toru Onuma graduated from Tokai University and obtained a master's degree at the same university. He studied at Humboldt-Universität zu Berlin. Onuma made his debut as Iago in *Otello* at Nikikai Opera in 2010. He has appeared as Papageno in *Die Zauberflöte*, Jochanaan in *Salome*, Amfortas in *Parsifal*, and Kurwenal in *Tristan und Isolde*, among others. He is a member of Nikikai.

Chorus Nikikai Chorus Group

合唱 二期会合唱団



都響スペシャル「第九」(2016年12月26日/サントリーホール/ヤクブ・フルシヤ指揮 二期会合唱団 他)

「二期会」は1952年に誕生、現在では2700名を超える会員を擁する、世界でも類をみない声楽家団体に成長した。「二期会合唱団」は1953年に結成された、我が国最初にして最古のプロフェッショナル合唱団。活動の中心を二期会オペラ公演に置きつつ、主要オーケストラへの客演や独自の演奏会など、多岐にわたる活動を展開している。都響とは恒例の都響スペシャル「第九」で共演を重ねているほか、2012年には「新・マーラー・ツィクルス」に参加、交響曲第2番《復活》および交響曲第3番に出演した。

Nikikai Chorus Group, the first professional chorus group in Japan, was established in 1953. Centering its activities in opera performances, Nikikai Chorus Group also makes guest appearances with major orchestras, and gives original concerts and performs in schools. The Chorus appears regularly with TMSO at concerts of Beethoven's Symphony No.9.

Chorus Master

MASUDA Hiroaki

合唱指揮

増田宏昭



東京藝術大学音楽学部ピアノ専攻卒業。同大学大学院指揮科修了。バイエルン州立歌劇場でサヴァリッシュ、パターネーらのもとで研鑽を積んだ。1987年以降、ドイツの歌劇場でキャリアを重ね、コブレンツ劇場首席指揮者、ザールラント州立劇場首席指揮者、ノルトハウゼン劇場およびゾンダースハウゼンLOH管弦楽団音楽総監督などを歴任。

Hiroaki Masuda graduated from Tokyo University of the Arts and obtained a master's degree at the same university. He studied in München. Masuda was formerly Principal Conductor of Theater Koblenz, Principal Conductor of Saarländisches Staatstheater, and General Music Director of Theater Nordhausen/Loh-Orchester Sondershausen.

ベートーヴェン： 交響曲第9番 二短調 op.125《合唱付》

保守反動の時代に書かれた「第9」

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)は人生の様々な場面で多くの苦悩に見舞われながら、それに対し勇猛果敢に立ち向かう生涯を送った。またただからこそ、19歳の折に遠くフランスで勃発したフランス革命(1789年)に終生大きな共感を寄せ、「自由・平等・友愛」の革命精神の体現を追い求めようとした。

だが、その理想はけっして一筋縄でゆかなかった。例えば「革命精神の体現者」を自称し、18世紀末から19世紀初頭にかけてヨーロッパ中を席卷したナポレオン・ボナパルト(1769~1821)に対して、ベートーヴェンは一時大いに熱狂する。だがナポレオンが単なる侵略者であり出世欲の持ち主でしかないことを悟るや否や、当のナポレオンに対する怒りを爆発させ、失望を露わにしていっていった。

さらにナポレオンが失脚した1810年代半ば以降、反ナポレオン、反革命を唱える保守反動政治がヨーロッパ中で敷かれてゆく。とりわけその中心的存在だったハプスブルク帝国の都ウィーンでは、水も漏らさぬ監視体制が確立された。政治的なことを口にすれば街の随所に配備された秘密警察官に逮捕され、命さえ奪われかねない状況の中、ベートーヴェン自身もこれまで以上の不自由と懊悩を味わってゆくこととなる。

実のところベートーヴェンは、保守反動勢力がいよいよ力を持ち始めた1814年に交響曲第8番を初演して以来、10年ほど交響曲を完成させることから遠ざかってしまう(何しろ交響曲第9番が完成されたのは、1824年のことだった)。ベートーヴェンにとって交響曲とは、多様な音量と多彩な音色を奏でられるオーケストラというメディアを用い、自らの意見を音楽を通じて広く世に発信するマニフェスト的な性格を具えていた。ところが、当のマニフェストを発表する会場に秘密警察官が紛れ込んで演奏会を妨害したり、彼と意思を同じくする人々を検挙していったりすると……？ 新作交響曲を書いたところで、ウィーンでの上演は難しいという状況が出現していた。

ウィーン初演を求める嘆願書

交響曲第9番の作曲が本格化するようになったそもそものきっかけは、1817年にロンドンのフィルハーモニック協会から新作交響曲の依頼が舞い込んだことにあ

る。となれば当作品がロンドンをはじめ、ウィーン以外の都市で世界初演される可能性が出てきた。またベートーヴェン自身、(彼から見ると「軽薄」なロッシーニのオペラが大流行していた) 当時のウィーンに相当の失望を抱いていたという事情も手伝って、ウィーンにいる音楽愛好家たちはやきもきさせられていたようだ(じっさい交響曲第9番のベルリン初演も噂されていた)。

結果、交響曲第9番をウィーンで上演してほしいという嘆願書がベートーヴェン宛てに書かれ、さらにはそれが地方紙2紙にも掲載されるという社会的出来事にまで発展する。嘆願書をしたためたのは、モーリツ・リヒノフスキー伯爵(1771~1837)をはじめ、貴族・市民を問わずベートーヴェンを崇拝していた人々。しかも彼らは当時のウィーンの音楽界における有力者で、こうした後押しが、声楽の導入という危険な要素(後述)を具えた交響曲第9番のウィーンにおける世界初演を可能にしたのである。

またこの作品と並んでウィーン初演(ただし全曲からの抜粋)が行われた《ミサ・ソレムニス》は、ベートーヴェンの支援者であると同時に当時のハプスブルク帝国皇帝の実弟だったルドルフ大公(1788~1831)のために書かれた作品であることから、当局も演奏会の開催について異議を差し挟みにくい状態だった。

内なる革命理念の昇華

交響曲第9番では、終楽章に声楽が付く。つまり「音」だけでなく「声」や「言葉」によるマニフェストでもあって、これが当時の社会状況にあっていかに危険であったかは容易に想像できるだろう。さらにその「言葉」は、フリードリヒ・シラー(1759~1805)の作品に拠っている。シラーは革命思想に燃え、それゆえに様々な筆禍を蒙った詩人として市民階級の崇拝の対象だった。そのような人物の作品を公の場で、しかも大勢の人々が大きな声を合わせて歌うとなれば、それだけで政治的なデモンストレーションであると当局から受け取られる可能性はなかったのか。

実のところベートーヴェンが当作品に声楽の導入を決断したのは、完成のわずか半年前のことだった。いわばぎりぎりの決断であって、たとえ声楽を導入するにしても何をテキストに用いるかは大きな問題に他ならなかった。結果ベートーヴェンは、若い頃から親しんだシラーの頌歌『歓喜に寄す』を基にしつつも、その中味をかなり大胆にカットし、さらに冒頭には自分自身の書いた開始部を付け加えるということをやったのけた。

もちろんそこには、シラー作品に具わった革命性を漂白し、検閲を通り易くするという現場主義的な考えもあったろう。だがベートーヴェン自身、現実世界の革命

に対して幾度も挫折を味わいながらも、だからこそ自らの内に^{たぎ}り続ける革命理念への情熱を昇華させ、単なる階級闘争から人類愛、人間の進むべき道を謳い上げる方向へと向かっていったのではないか。

またそれゆえに、交響曲第9番は単なる革命時代の所産という位置にとどまらず、音楽によるユートピアを徹底的に体現したパイオニア的存在として、後世にも大きな影響を与えていったのである。

(小宮正安)

第1楽章 アレグロ・マ・ノン・トロppo、ウン・ポコ・マエストーソ

第2楽章 モルト・ヴィヴァーチェ〜プレスト

第3楽章 アダージョ・モルト・エ・カンタービレ

第4楽章 プレスト〜アレグロ・アッサイ

作曲年代：1818～24年

初 演：1824年5月7日 ウィーン ケルントナートーア劇場

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、シンバル、トライアングル、大太鼓、弦楽4部、独唱（ソプラノ、メゾソプラノ、テノール、バリトン）、混声4部合唱



ウィーンのベートーヴェン記念像